

売店のおばちゃんとチョコレート ート・改稿版

STAYFREE

午後三時から九時までの六時間、私は駅の売店で働いている。毎日、多くのお客さんがお菓子やジュースや新聞を買っていく。お客さんが商品を置いて、私がお金をもらう。そのやり取りは二十秒ぐらい。でも、そんなわずかなやり取りにも、お客さんとのつながりを感じて、心が震えてしまう時がある。

いつも夕刊を買っていく、小学生の女の子がいる。私立の学校に通っているのだろうか？ ランドセルではなく普通のカバンを右手に持ち、立派な仕立ての制服を着ている。午後四時ごろ、その女の子は私の売店で夕刊と、たまにチョコレートを一緒に買っていく。小学生の女の子が夕刊？ ちょっと気になっていたの、女の子に声をかけてみた。

「この新聞、あなたが読むの？」

「いいえ、これはお父さんが読むんです」

「そうなんだ。じゃあ、お父さんのために買って行ってあげているんだね」

「うん。お父さんが家に帰ってきたら、今日もお疲れ様ですって言ってわたしが渡すの」

「そうかあ、偉いねえ。お父さん喜ぶでしょう」

「うん。それでね、今日は学校の勉強はできたかって、わたしに聞いてくれるの。わたしが学校であったことを話すとお父さんはうれしそうに聞いてくれて。あと、新聞と一緒に買ったチョコレートも二人で食べるの。お父さんは甘いものが大好きだから、喜んでくれるんだ。それで、お父さんはお休みがほとんどなくて、いつも忙しそうだから、お話しできるのはこの時ぐらいなの」

今はこんな家庭が多いのかなあと思う。でも、この子はまだ幸せだろう。たとえ少しでも父親と話す時間があって、私の娘には幼いころから父親のいない寂しさを味あわせてしまった。私は娘が六歳の時に離婚している。

電車がホームに入ってきた。「じゃあね」と女の子に声をかける。「さようなら」女の子は笑顔で走って電車に乗っていった。

この日以来、この女の子が来るといつも一言、二言、会話を交わすようになった。自分の娘にもこんな頃があった。なつかしい。今、娘は三十二歳になっているはず、でも、言葉を交わすことは全くない。

私が夫と別れてから、娘は心を閉ざしてしまい、中学生になると非行に走るようになった。その後、十六歳で彼氏との間に子供ができてしまい、連絡先も伝えずに家を出て行ってしまった。その後、娘は全く連絡もしてくれなくて、音信不通の状態が続いている。

次の日、平日にもかかわらず、女の子は姿を見せなかった。風邪でも引いて学校を休んだのだろうか。次の日、その次の日も女の子は現れなかった。

そして、そのまま二週間が経った。今は夏休みでも冬休みでも春休みでもない。学校はあるはずなのに――。

今日は来てくれるかな。祈るような気持ちで次の週の月曜日を迎えた。女の子は夕方四時にホームに姿を見せてくれた。あの子だ！ 私はそれに気づき、ホッとして女の子が店に近づいてくるのを待っていた。

……でも、女の子は売店には寄らずにそのまま電車に乗ってしまった。私は思わず、店から飛び出して声をかけようと思ったが、ほかのお客さんが来て遮られてしまった。

なんで、今日は夕刊を買わないで行ってしまったのだろう。お父さんにもういらんっていわれたのだろうか。

翌日いつもの時間に女の子はホームに姿を見せた。私は、店から出て女の子に話しかけた。

「こんにちは」

「こんにちは……」

返事をした女の子の顔に笑顔はなかった。

「新聞、もう買わないの？」

「うん。もう買う必要がなくなっちゃったの……」

そう言うと、女の子は目に涙をためて、今にも泣き出しそうな表情になってしまった。

「どうして？」

「お父さん、交通事故で死んじゃったの。もういないのお父さん。新聞も渡せなくなっちゃった」

「えっ……」

私は何も言えなかった。ショックだった。とても悲しくなり、涙がボトボト零れ落ちてしまった。

「どうして、おばちゃんが泣くの？」

女の子は不思議そうな顔で私を見つめる。私は堪らなくなって、女の子を抱きしめた。私に抱きしめられた瞬間に女の子もしくしくと泣き出した。そのまま、ホームの真ん中で五分ぐらい抱きしめていた。周りの目など全く気にならなかった。

次の電車が来た時に女の子は私の腕から離れた。

「もう帰らなくちゃ」

「うん、ごめんね。元気出しなよ」

「ありがとう」

女の子が言ったこの一言が胸に沁み込んだ。一度落ち着きかけた涙腺がまた刺激された。

「頑張ってね」

「うん！じゃあね。バイバイ！」

「バイバイ！」

この後、女の子は新聞を買うことはなくなったけど、小学校を卒業するまで、毎回、私の売店

に来てくれた。会話はいつも取り留めのない話ばかりだったが、とても心が癒された。孫がいたらこんな感じなのだろうと、寂しさを紛らわすことができた。

そして、もう一人、いつも気になっているお客さんがいた。きっと、私の娘と同じ年ぐらい。仕事の帰りなのだろう、夜七時ぐらいに時々、チョコレートを買っていくOLさん。

職場で辛いことが多いのだろうか、彼女がチョコレートを買っていくときはいつも暗い顔で悲しい表情をしている。勝手だけれど、私はまるで自分の娘のように彼女のことを気にかけるようになってしまった。でも、小学生の女の子のように声をかけるのは、勇気のいることだった。厳しい世の中だし、今の若い子は特に辛いことなどなくても、こんな感じなのかもしれない。そう思っていた

※※※

最近、駅の売店でチョコレートを買うようになった。落ち込んだ時に。

普段は甘いものはあまり食べない。でも、辛いことがあった時は甘いものが、特にチョコレートが食べたくなる。昔から、気持ちが落ち込んだ時には食べ物や音楽やドラマや物質的なもので、気持ちを紛らわせてきた。相談事をするような友達もいない。恋人なんてもちろんいなくて、わたしはいつも一人ぼっちだった。

仕事の帰りの地下鉄の乗換駅。小さな売店で、うつむき加減で、何も言わずに赤いパッケージのミルクチョコレートと百円玉と十円玉をトレーに置く。

「はい、五円お返し」

いつもこの売店でチョコレートを買う。売店のおばちゃんの顔も覚えてしまった。どこにでもいそうな五十代ぐらいのおばちゃん。

三路線が乗り入れるこの駅には乗降客でたくさんの人がせわしなく行きかっている。上りの電車、下りの電車が到着する度にたくさんの人が電車の中から飛び出してくる。これだけたくさんの方がいるのに皆、わたしと同じような生気のない表情をしているように見える。

電車に乗る前にチョコレートのパッケージを開けて一粒、口の中に入れた。いつも買うこのチョコレートは一口サイズのチョコが十二粒入っている。

甘い。朝から苦い思いしかしなかったわたしの脳みそが今日初めて感じた甘いという感覚だった。

二粒目を口に入れる。そして、ため息をつく。仕事でミスをした。取引先に大変な迷惑をかけてしまった。単純な発注ミスだった。部長に怒られた。次にミスをしたらクビだと言われた。この能無しが！と怒鳴られた。

三粒目を口に入れた。電車が突然、急ブレーキをかけた。手に持っていたチョコレートはわたしの手から抜け落ち、床に落ちた。残っていた九粒はすべて床に散らばってしまった。

電車は動き出して、自分が降りる駅へと到着した。わたしは自分がばら撒いてしまったチョコレートを拾う気力もなく、そのままの状態ホームに降りた。

それから二週間後、わたしはまた売店でチョコレートを買った。売店の店員はいつもと同じおばちゃんだった。わたしはまたうつむき加減で何も言わずにトレーに赤いパッケージのチョコレートと百円玉と十円玉を置いた。

「はい、五円お返し」

おつりを手に取り、おばちゃんの顔をちらりと見る。おばちゃんは何とか心配そうな顔をしている。気のせいだよ。心の中でつぶやき、わたしはまた下を向く。

わたしにはひそかに思いを寄せていた男性がいた。同じ部署の三歳年下の男性。いつも明るくて、元気で、頭が切れて、仕事もバリバリこなし、人当たりもよく、稚拙な表現だけど太陽のような笑顔をもったさわやかな男性だった。そして、彼は自分の周りの皆にやさしい、思いやりのある男性だった。それは美人でもかわいくもない、何のとりえもないわたしにも……。

一週間前、私は風邪をひいて体調を崩してしまった。朝起きて、体温を測ると熱は三八度一分。何でもない普通の日であれば、仕事を休ませてもらうところだったが、その日は大事な会議があり、休むわけにはいかなかった。

しかも、その会議は彼がリーダーで、社運のかかった……とまではいなくてもとても重要なプロジェクトの会議だった。

わたしは無理を押し出して出社をし、会議にのぞんだ。意識は朦朧としていたが、会社の為に……、いや、好きな人の為にすこしでも力になるのだと、頭がい骨の中心から頭の中を四方八方に広がる痛みを耐え、胃からせり上げてくる、無情で非情な吐き気と闘いながら必死に会議室の椅子にへばりついてた。

会議が始まり、十五分が経過した。では、資材調達のコストとその実用性について、斉藤のほうから説明させていただきます。

名前を呼ばれ、立ち上がったその時だった。必死に闘っていた、無情で非情な生理現象にわたしは屈してしまった。会議室の机の上に液体が滴りおちる。会議室の中に酸性の嫌なにおいが立ち込める。

「斉藤さん！ 大丈夫ですか？ 体調、悪いんですね？ すぐに医務室に行きましょう」

ざわつく重役たちの視線を遮るように彼はわたしの横に立ち、わたしの腕を優しくつかみ、会議室から出て医務室へ連れて行ってくれた。

「ちょっと、顔が赤いなあとは思っていたんですけど、気づかなくて本当にすみません」

わたしのような人間にこんなにやさしい言葉をかけてくれた男性が今までにいたのだろうか？ わたしは彼に恋をしてしまった。でも、それは叶わぬ恋だった。

彼が皆の前でわたしの同期の女性と結婚をすると報告をした。大事なプロジェクトの途中でこんな報告もどうかと思ったのだけどと彼は言っていたが、同僚は皆、びっくりした顔で二人のことを祝福した。二人が結婚するような関係であったことにわたしはもちろん、誰一人として気づいていなかった。

わたしは彼への思いが叶うなどとは夢にも思っていなかったが、やはりショックだった。わたしがひそかに思いを寄せていたことなど、彼は知る由もなかっただろう――。

わたしは失恋した。これが今日チョコレートを買った理由。

電車に乗る前にチョコレートのパッケージを開けて一粒、口の中に入れた。甘い。ただ、甘いという味覚しかない。その“甘い”は自分が持っているどの感情とも結びつかなかった。

ホームに電車が到着する。いつもはたくさんの人が降りてくるのに、なぜか今日はあまり人が降りてこない。

電車に乗り込んだ。でも、なかなか電車は発車しない。どうやらひとつ先の駅で、何かトラブルがあったようだ。二粒目のチョコレートを口に入れる。何も感じない。三粒目、四粒目、甘いはずのチョコレート、美味しいはずのチョコレートなのに……。

わたしは自棄になって、残っているチョコレートをすべて口の中に放り込んだ。まわりの乗客がちらりちらりとわたしを見る。わたしの口の中はチョコレートでいっぱいになり、頬は限界まで膨らみ、やがて目にはうっすらと涙が浮かんでくる。

わたしは電車から降り、ホームにある水飲み場の排水溝に口の中に残っているチョコレートすべてを吐き出した。さっき、チョコレートを買った売店のおばちゃんがわたしのもとに来て背中をさすってくれた。おばちゃんは何も言わずにただ、私の背中をさすってくれた。

でも、わたしはチョコレートをすべて吐き出しても涙が止まらなかった

※※※

今日もあの子は辛そうな顔をして、チョコレートを買っていった。職場で何かあったのだろうか？ それとも、失恋でもしたのだろうか？ 友達に裏切られたりしたのだろうか？ 前に見た時より、げっそりとしていて、痩せてしまっていたように見えた。

いつものようにチョコレートを買って、電車に乗り込んでいく彼女を私は横目で見ていた。電車に乗る前にチョコレートを一粒食べた。電車に乗り込んでから、二粒目、三粒目、今にも泣きそうな顔で次々とチョコレートを口に入れている。

涙目になって、彼女は電車から降りてきた。水飲み場の排水溝でチョコレートを吐き出している。それをみて、私は居た堪れない気持ちになり、彼女のへ行き、背中をさすってやった。何があったのかはあえて聞かなかった。

彼女は次の電車に乗り、家へと帰って行った。

※※※

また.....わたしは駅の売店でチョコレートを買った。翌日のことだ。理由は何もない。いや、自分が嫌だから。嫌いだから。情けないから。自信がないから。

売店の店員はいつもと同じあのおばちゃんだった。売店の前に立って、手をのぼそうとしたわたしに、赤いパッケージのチョコレートを手に持っておばちゃんが言った。

「これだね」

「.....」

わたしは何にも言葉を返せなかった。

「元気出しなよ。そんなにつらいことばかりじゃないよ。頑張っていれば必ず、いいことがあるから！」

「.....」

温かった。おばちゃんの手がとても温かくて胸にジーンと沁みた。でも、不思議と涙は出てこなかった。

トレーに百円玉と五円玉を置いた。お釣りがないはずなのに、おばちゃんはわたしのほうに手を伸ばしてきた。

おばちゃんの手がわたしの手を優しく包み込んだ。おばちゃんは何も言わずに穏やかな笑顔で一度、頷いた。「.....ありがとう」 ちいさな、ちいさな声でわたしはそう言った。おばちゃんはわたしの顔をみてもう一度頷いた。

電車が来た。私はなぜかチョコレート

のパッケージを開ける気にはならなかった。

※※※

その日は私の方から彼女に話かけてしまった。黙っているのが耐えられなかった。自分の娘を見ているようで、放っておけなかった。気の利いたことは何も言えないけれど、何とか少しでも元気を出してほしい。もし、複雑で冷たい人間関係の中で孤立しているのなら、少しでも人の温もりを感じてほしい。そう、思った。

口に出しては言わなかったけど、“あなたはまだ若いよ、これからなんだから、笑顔で前向きになりなさい”そんな思いを込めて、彼女の手を握って微笑んだ。

「ありがとう」小さな声で彼女は言った。私は自分の娘から言われた最後の“ありがとう”を思いだそうとした。あまりに昔のことでそれがいつのことだったか思い出せなかった。

私は彼女が買ったのと同じ、赤いパッケージのチョコレートの封を開け、一粒口に入れた

いつも乗っている帰りの電車は昨日とは違う空気が流れている気がした。さっきの売店ででの出来事が、自分の感覚を変えてしまっているのかもしれない。電車が自宅の最寄りの駅に到着した。売店で買ったチョコレートは未開封のままでバックに入っている。

駅から出て、自宅までの道を歩く。私の横を自転車に乗ったサラリーマンがなかなかのスピードで追い越していく。さらにその横の片側四車線の大きな車道を大きなトラックがかなりのスピードで追い越していく。

わたしは普通なら自宅まで徒歩十分の道を倍の時間をかけて歩いた。帰り道を歩くときはいつも、暗いことばかり考えていた。でも、今日はなぜだか少しだけ気持ちが落ちついている。

自宅に着いた。バッグをベッドの上に放り投げて、冷蔵庫を開けて牛乳をだし、コップに注ぐ。牛乳を一口飲んだら、甘いものが欲しくなった。わたしは、はっと思い出してバッグの中から駅の売店で買った赤いパッケージのチョコレートを取り出した。

パッケージを開けて、一粒口の中に入れる。

「おいしい」思わず声が出る。

「.....おいしい」胸が詰まる。

「おいしいよおおおっ.....」涙があふれる。

その時のわたしの頭の中に駅の売店のおばちゃんのやさしい笑顔が思い浮かんだ。

わたしは赤いパッケージのチョコレートをすべて食べきった。食べきることができた。

次の日、わたしはまた、駅の売店でチョコレートを買った。トレーに赤いパッケージのチョコレートと百円玉と五円玉を置く。その時のわたしは、ほんの少しだけ、笑顔を浮かべることができた。

※※※

次の日、彼女はまた売店にやってきた。でも、いつものような暗い顔ではないような気がした。彼女はいつもと同じチョコレートと百円玉と五円玉をトレーの上に置いた。

その後、彼女はほんの少しの笑みを浮かべた。彼女のその顔を見て、私は決心した。自分も前向きになろうと、ずっと連絡が取れない娘を何とかして探し出そうと、そう思った。